DOI：10.20776/S27582337-53-P17

吉田睦先生を送る

児玉　香菜子

吉田睦先生、ご退職おめでとうございます。吉田先生にこの言葉を送る日が来ることをまったく想定していなかったわたしは、いったい吉田先生にどのような文をつむげばよいのか、途方に暮れてしまいました。そこでまず定石通りに、不遜にも吉田先生の研究の功績を紹介したいと思います。

吉田先生のフィールドはロシア連邦の東西シベリア先住民の居住地であるツンドラ、タイガ地帯、研究テーマはトナカイ牧畜民の生活文化、特に食文化である。中でも西シベリアのツンドラ地帯を遊牧するネネツ人のトナカイ牧畜民に着目してきた。

吉田先生は異色の経歴をもつ。京都大学文学部時代には地理学を専門とし、卒業後の1981年から1992年の11年間を外務省の外交官として活躍する。その間、モスクワ大学での２年間の在外語学研修、２年間の極東・沿海地方にある在ナホトカ日本国総領事館勤務という、実に４年にもおよぶソ連滞在経験がある。ソ連崩壊後、外国人のロシア留学や現地調査が可能となるや、外務省を退職し、その２か月後にはロシア連邦にわたり、ロシア連邦科学アカデミーロシア史研究所の学位請求資格研修員となる。そのおよそ１年半後にロシア連邦科学アカデミー民族学人類学研究所大学院に入学すると、そのわずか３年半後に博士号を取得している。

その間とその後2001年までの現地調査については著書『トナカイ牧畜民の食の文化・社会誌』（2003年、彩流社）に詳しいが、実に、４度の現地調査を敢行し、訪問した宿営地は35か所、移動式天幕小屋は54軒にものぼる。アクセスにはヘリコプターやトナカイ橇、トラクターしかなく、広大な面積に分散し、かつ、移動して暮らすトナカイ牧畜民への「地を這う」ようにしておこなわれたであろう現地調査によって収集されたその一次資料の重みは計り知れない。

だが、吉田先生の研究のオリジナリティはその実地調査だけにあるのではない。外交官時代に培われたロシア語能力を駆使し、帝政ロシア時代およびソ連民族学の蓄積、さらに行政・統計資料を渉猟したうえで、トナカイ牧畜のこれまでのステレオタイプ的な言説を覆すとともにその現在を位置づけたことにあるといえる。上述した博士論文をもとにして刊行された著書には実に224ものロシア語文献が掲げられている。

この文献学的蓄積と人類学的調査を重ね合わせて明らかにされたのがトナカイ牧畜民の食文化の実像で、それはこれまでステレオタイプ的に語られてきたトナカイ牧畜民の主食は家畜トナカイ肉であるという言説を否定し、生業的多様性を反映した、実に多様な食生活とその文化を描きだした。とりわけ、内外で高く評価されているのが野生トナカイの狩猟とそれによる肉への嗜好性の高さと、魚食、粉食文化である。ツンドラ地帯のトナカイ牧畜民の食の多様性の背景にはミルク利用がないことを指摘しており、現在も盛んに議論されている家畜化起源説を考えるうえで、大変重要な知見であろう。

次いで強調したいのが、ソ連前後を断絶としてとらえることなく報告分析したトナカイ牧畜にかかる経済的、技術的側面から精神文化についての調査研究で、他の牧畜民との比較研究の土台となるものである。とくに、ネネツのトナカイ牧畜の特徴として、以下の２つを明らかにしている。１つは、集団化が進められたソ連時代の個人副業経営下において私有トナカイが一定の割合存在したこと。もう１つは、ソ連崩壊後、個人経営によるトナカイの比率が高いことである。現在、モンゴル、中国、中央アジアにおける社会主義集団化における牧畜の在り方がクローズアップされており、改めて指摘しておきたい。

2010年代に入ると、トナカイ牧畜研究と並行して、そのサブシステンスである寒冷地における内水面漁業との共通点から日本の氷下（こおりした）漁業についても調査研究を進めている。その研究を論じるほどの知識をわたしはもたないが、独自の視点による初の人類学的調査と言えるのではないだろうか。

ここまで少し固めに吉田先生の研究を紹介してきた。吉田先生が真面目で、決して他人に流されない強い信念をもつ一方で、その硬派な研究とは裏

腹にとてもユーモアにあふれ、学生に対して一番親身になって対応するということに吉田先生を知っている方なら異論はないだろうと思う。

こうした研究を支える現地調査について、人類学者なら１つ、２つ何かしら逸話をもっているものである。ある日、前任の荻原眞子先生から吉田先生はフィールド滞在中に、トナカイの橇での移動中、橇から落とされて一晩明かした、と聞いた。吉田先生にさっそく確認してみると、なんだかそんなに大したことがないように平然とされていた。そこで、今回この「送る言葉」を執筆するにあたりもう一度確認してみた。するとなんと、夕方５時から翌日朝６時まで11時間も一人で待っていたと言う。モンゴルよりずっと寒さが厳しいシベリアで、よく凍傷にかかることも、命にかかわることもなくすんだものである。また、たった１人で迎えに来てもらうのを待つその心細さといったら想像を絶する。聞けば、その時は遺書に近いものを残していたという。このエピソードを吉田先生からはじめに聞いたわけでもないところがまた、吉田先生の性格を表しているように思う。

もう一つ言及しておきたいのが、吉田先生がフィールドで撮影した写真である。学内の研究会でみた吉田先生の写真の美しさに圧倒された。とりわけ、女性が美しい。これら貴重かつ美しい写真の多くはリバーサル（スライド）やネガで撮影されたもので、その一部はデジタル化され、現在東北大学東北アジア研究センター地域研究デジタルアーカイブ・プロジェクトにて公開が進められている。これら写真のいくつかはパネル化され、2021年には調査収集データの現地への還元の一環として、ロシアの調査地に近い都市で写真展が開催されたという。また、吉田先生はユーラシア言語文化講座の教員、大学院生に声をかけ、2007年と2017年に千葉大学附属図書館で写真展を開催している。

吉田先生は資料収集にも熱心に取り組まれており、2003年に平成14年度文部科学省大型コレクションの一環として整備されたマイクロフィッシュコレクションである「ユーラシア関連コレクション」を千葉大学附属図書館に受け入れている。また、2009年には蔵書５千冊余の寄贈を受けた言語学者でハンガリー文学者でもある徳永康元元東京外国語大学教授の「徳永康元氏とその蔵書」という展示とシンポジウムを、故金子亨文学部教授を筆頭とす

る講座教員と共同しておこなっていることも付け加えておきたい。

吉田先生の大学院・学部教育における役割についてはユーラシア言語文化論講座で刊行している論文集『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(25号)に寄せられたソロンガさんの「すばらしい先生に出会えて―吉田睦先生のご退職にあたり」をぜひ一読していただきたい。

このたび、あらためて吉田先生のこれまでの研究を振り返ってみて、もっともっと教えを乞うべきことがあったことも痛感している。ついては、退職したからといってこれで終わりではなく、いやむしろ、より研究によせて、吉田先生からより多くのものを学べる機会を作っていきたいと考える次第である。

最後に、私事であるが、わたしは千葉大学に着任以来、これまでほぼ自由に海外渡航でき、かつ、２回、約２年もの産前産後休暇・育児休暇を取得し、さらに１年間サバティカルを取得することができた。それはひとえに講座ならびにコースの先生方の理解があってこそだが、何より吉田先生が一貫して支持してくださり、その間の教育等を一手に引き受けてくださったからこそである。わたしが所属するユーラシア言語文化論講座は、先輩仲間に恵まれた楽しい職場で、そこにいることができるわたしはとてもしあわせだと最近とみに感じている。それは吉田先生がいてこそのことだったとつくづく思う。

吉田先生、今まで本当にありがとうございました。

吉田睦先生　略歴

略歴

1958年	千葉県市川市に生まれる
1974年	神奈川県立湘南高校入学
1977年	同卒業
1977年４月	京都大学文学部　入学
1981年３月	京都大学文学部　卒業
1981年４月	外務省入省
1982年７月～1984年６月	在ソ連邦日本国大使館
1984年７月～1986年８月	在ソ連邦ナホトカ市日本国総領事館
1988年８月～1990年８月	内閣官房内閣情報調査室（出向）
1992年９月	外務省退職
1992年11月	ロシア連邦科学アカデミーロシア史研究所　学位請求資格研修員
1994年３月	ロシア連邦科学アカデミー民族学人類学研究所大学院　入学
1997年９月	ロシア連邦科学アカデミー民族学人類学研究所大学院　修了
1999年４月	千葉大学文学部　助教授
2006年４月	同准教授
2009年４月～2017年３月	同教授
2015年４月～2016年３月	在外研究（ケンブリッジ大学）
2017年４月～	千葉大学大学院人文科学研究院　教授
2021年４月～	千葉大学人文公共学府地域研究センター長

学会関係

2016年～2022年３月	日本シベリア学会幹事
2019年６月～2022年３月	日本シベリア学会会長

委員歴

学内（委員長以上）

日本文化学科長、教務委員長、日本・ユーラシア文化コース長、広報・情報委員長、各種人事委員会委員長

学外

2009年３月～	北方民族博物館研究協力員
2011年～2014年	北方民族博物館・北方民族文化シンポジウム運営委員 （第26～29回「環境変化と先住民の生業文化」）

吉田睦先生　著作一覧

著書（単著・共著）

1．З.П. Соколова（ред.), Социально-экономическое и культурное развитие народов Сибири и Севера: традиция и современность. Москва: Институт этнологии и антропологии РАН 1995.
担当：А. Ёсида, Современная ситуация традиционной культуры питания Гыданских ненцев（Ямало-Ненецкий А.О.）
（Z.P. ソコロヴァ編『シベリア北方諸民族の社会・経済的及び文化的発展：伝統と現代性』1995. モスクワ：ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所出版）
（担当：吉田睦（露文）「ギダン半島（ヤマル・ネネツ自治管区）のネネツの伝統的食文化の現状」77–117頁）

2．Ацуси ЁСИДА, Культура питания гыданских ненцев (интерпретация и социальная адаптация). Москва: Институт этнологии и антропологии РАН. 1997. 252 с.
（吉田睦『ギダン・ネネツの食文化　解釈と社会適応』（露文）1997. モスクワ：民族学人類学研究所出版　252頁（単著））

3．Народы Сибири（Сибирский этнографический сборник 8）Книга 3, Москва: Институт этнологии и антропологии РАН, 1997. 304 с.
担当：А, Ёсида, В поисках предков гыданских ненцев (по литературным источникам). Стр. 140–170.
（『シベリア諸民族（シベリア民族学論集８）第３巻』1997. モスクワ：民族学・人類学研究所出版　304頁）
（担当：ギダン・ネネツの祖先の探求（文献資料に基づく研究）140–170頁）

4．『トナカイ牧畜民の食の文化・社会誌～西シベリア・ツンドラ・ネネツの生業と食の比較文化～』2003. 彩流社　274＋28頁（単著）ISBN: 4882028093

5．『北アジアにおける人と動物のあいだ』小長谷有紀（編）、2002. 東方書店 367頁　ISBN: 4497202135
担当：「シベリア先住民における魚の禁忌と聖性」(43–71頁)

6．Е.А. Пивнева, Д.А. Функ (отв. ред.), В поисках себя: народы Севера и Сибири в постсоветских трансформациях. Москва: Наука, 2005. ISBN: 5020335185.
担当：А. Ёсида: Современное оленеводство тазовских ненцев стр. 40–64.
（E.A. ピヴネヴァ、D.A. フンク編『自己の探求：ポストソヴィエト期の変革におけるシベリア・北方諸民族』2005. モスクワ：ナウカ社　216頁
（担当：「ターズ・ネネツ人の現代トナカイ牧畜」(40–64頁)）

7．『極北（世界の食文化20）』岸上伸啓（責任編集） 2005. 農山漁村文化協会　253頁　ISBN: 9784540050060
担当：第４章「西シベリアの先住民族」(161–206頁)

8．『ヨーロッパ（講座世界の先住民族06)』綾部恒雄（監修)、原聖、庄司博史（編）2005. 明石書店　421頁　ISBN: 4750321346
担当：19「ネネツ（極北のトナカイ遊牧民)」(336–351頁)

9．『東北アジア(朝倉世界地理講座—大地と人間の物語２)』岡洋樹、境田清隆、佐々木史郎(編）2009. 朝倉書店　391頁　ISBN: 97842541679242009
担当：第３章3. 2 「石油・天然ガス開発とツンドラの荒廃」(99–108頁)
第４章4. 1 「帝政期ロシアのシベリア統治」(119–129頁)

10. 『開発と先住民（みんぱく実践人類学シリーズ７)』岸上伸啓（編著）2009. 明石書店　365頁　ISBN: 9784750330907
担当：第２章「ロシア・西シベリアにおける石油・天然ガス開発とトナカイ牧畜民」(35–61頁)

11. Е.А. Пивнева (отв. ред.), Этнокультурное наследие народов Севера России: к юбилею доктора исторических наук, профессора З.П. Соколовой, Российская акад. наук, Ин-т этнологии и антропологии им. Н.Н. Миклухо-Маклая. —Москва: ИЭА, 2010. 304 с., ISBN: 978–5–4211–0028–7.

担当：A. Ёсида, Оленеводство ламыхинскиой группы эвенов в современных условиях（ГУП «Себян»). С. 221–234.
（E.A. ピヴネヴァ編『ロシア北方諸民族の民族文化遺産（Z.P. ソコロヴァ歴史学博士・教授生誕80周年記念)』モスクワ：民族学・人類学研究所出版
（担当：「現代的条件におけるラムィヒン・エヴェンのトナカイ牧畜（セビャンキュヨリ村国営企業「セビャン」)」（221–234頁））

12. 『極寒のシベリアに生きる：トナカイと氷と先住民』高倉浩樹（編著）2012. 新泉社　257＋13頁　ISBN: 9784787711120
担当：第６章「シベリアのトナカイ牧畜・飼育と開発・環境問題」（137–156頁）

13. Н.В. Лукина（ред.), Исследования по культуре ненцев: сборник статей / Гос. казенное учреждение Ямало-Ненецкого авт. округа “Науч. центр изучения Арктики” Санкт-Петербург: Историческая иллюстрация. 2014. 286с., ISBN: 978589566141.
担当：А.Ёсида, Этническаяистория тазовских ненцев. С. 113–129.
А.Ёсида, Этническая культура тазовских ненцев и ее трансформация. С. 130–151.
（N.V. ルキナ編『ネネツ文化研究論集』2014. サンクト・ペテルブルグ：イストリ―チェスカヤ・イリュストラッツィヤ社　286頁）
（担当：「ターズ・ネネツ人―民族の歴史」（113–129頁）
「ターズ・ネネツ人―民族文化とその変容」（130–151頁））

14. 『食と儀礼をめぐる地球の旅：先住民文化からみたシベリアとアメリカ』高倉浩樹、山口未花子（編）2015. 東北大学出版会　219頁　ISBN: 9784861632501
担当：２.「シベリア・トナカイ牧畜先住民における食の多様な世界」（33–59頁）

15. 『シベリア：温暖化する極北の水環境と社会』檜山哲哉、藤原潤子（編

著）　2015.　京都大学学術出版会　512頁　ISBN: 9784876983155
担当：第11章「資源動物利用に関わる環境変動と住民の適応」（385–420頁）

16. 『ロシア（世界の地誌シリーズ９）』加賀美雅弘（編）　2017.　朝倉書店　177頁　ISBN: 9784254169294
担当：第４章「世界の穀倉地帯　ロシアとその周辺：ウクライナ、中央アジア」、「モスクワ市内のパン事情」（コラム）、（37–52頁）
第10章　「多様な民族と地域文化」、「多民族国家ロシア—モスクワの民族料理店事情」（コラム）（128–142頁）

17. T. Hiyama, H. Takakura (eds), 'Global Warming and Human-Nature Dimension in Northern Eurasia' (Global Environmental Studies) 2017. Springer. 224p. ISBN: 9789811046483.
担当：A. Yoshida, "Chapter 9 Reindeer Herding and Environmental Change in Reindeer Herding Regions of the Sakha Republic: Comparison with the Yamal-Nenets Autonomous District."（145–160頁）

18. 『アジアとしてのシベリア：ロシアの中のシベリア先住民世界（アジア遊学227)』永山ゆかり、吉田睦（編）　2018.　勉誠出版　270頁　ISBN: 9784585226932
担当：「はじめに（シベリア～ロシアとアジアの狭間で～）」（4–9頁）
「シベリア史における先住民の成立—先住民概念と用語について」（66–81頁）

19. 『食の世界を生きる：食の人類学への招待』河合利光（編著）　2021.　時潮社　229頁　ISBN: 9784788807495
担当：第４章１「食環境の変化と共生」（170–189頁）

20. 『北極域の研究—その現状と将来構想』北極研究コンソーシアム長期構想編集委員会（編）　2024.　海文堂出版　480頁　ISBN: 978-4-303-56230-4
担当：3. 2. 2「ユーラシアの北極地域」（218–224頁）
5. 2. 3「河川・湖沼の氷上の利用とその持続可能性」（295–297頁；一部執筆）
5. 2. 4「経済開発にともなう環境汚染と災害リスク」（297–299頁；一部執筆）

論文

1．「シベリア・北方少数民族、もう一つの民族問題」1995. 1『ユーラシア研究』6：637–641
2．「ギダン半島のトナカイ飼育ネネツ（ヤマロ・ネネツ自治管区）の食文化の現況」1996. 3 斎藤晨二編『シベリアへのまなざし—シベリア牧畜民の民族学的研究』（平成５−７年度科学研究費補助金成果報告書）156–164
3．「西シベリア・ギダン・ネネツの食文化：現代極北トナカイ飼養民の食の文化的・社会的解釈」1998. 6『民族學研究』63(1)：44–66
4．「ロシア連邦先住民基本法の採択とロシア先住民の法的地位」2000. 3 齋藤晨二編『シベリアへのまなざし２—シベリア狩猟・牧畜民の生き残り戦略の研究』（平成９〜11年度科学研究費補助金成果報告書）28–44
5．A. Yoshida, “Some Characteristics on the Tundra Nenets Reindeer Herders of Western Siberia and their social adaptation.” 2001. 12 ‘Senri Ethnological Studies’ 59：67–80.
6．「ロシア・トナカイ遊牧ネネツの食の現状と構造」2001. 12『食文化助成の報告』12：73–80（財）味の素食の文化センター
7．「遊牧ネネツの食文化（上）極北の牧畜生活と獣肉・魚肉の生食文化」2003. 5『Vesta』50：62–67
8．「遊牧ネネツの食文化（下）移動生活者の食の空間と調理法」2003. 8『Vesta』51：68–71
9．「極北トナカイ遊牧民の食文化—ロシア・西シベリアのツンドラ・ネネツの生活と食の現状」2003『食生活研究』23(3)：11–19
10．「シベリア・ネネツのトナカイ飼育の現在—個人経営の現状とその特徴」2003. 3 井上紘一編『社会人類学からみた北方ユーラシア世界』67–77 北海道大学スラブ研究センター
11．「ロシアの異民族（先住民）統治史における『非定住民』：概要と西シベリアの状況」2003. 11　岡洋樹・高倉浩樹・上野稔弘編『東北アジアにおける民族と政治』東北アジア研究シリーズ５．89–109 東北大学東北アジア研究センター

12.「ネネツのトナカイ牧畜―トナカイの個体認識と親和性」2005. 3『Arctic Circle』54：4–9
13.「極北牧畜民の魚食文化」2006. 5『ビオストーリー』5：92–93
14.「シベリアの牧畜民とトナカイ―家族経営の牧畜民と家畜との共存」2006. 10『季刊東北学』（特集　家畜とペット）9：136–146
15.「ツンドラ・ネネツのトナカイ牧畜：群管理の構造と実態：2005年ギダン・ネネツ春季キャンプ調査報告」2006. 10『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 9 ：31–56
16.「ネネツ―経済自由化にともなうトナカイ牧畜とその変化」2008. 3『季刊民族学』(特集　ロシア北方の民―ソ連崩壊後の激動期を経て)32(2)：20–24
17.「極北の環境とロシアにおけるトナカイ牧畜―西シベリアとサハ共和国の事例から―」2011. 3『Arctic Circle』(特集　北方民族と環境４)(78)：4–9
18.「サハ共和国北部におけるトナカイ飼育と環境変化」2011. 3『温暖化するシベリアの自然と人―水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応』（平成22年度FR研究プロジェクト報告）141–149
19.「森林ネネツ（ロシア・西シベリア）のトナカイ牧畜―先行研究概説―」2009. 3『千葉大学ユーラシア言語文化論集』11：1–20
20.「ユーラシア（徳永）文庫とシンポジウム開催」2010. 3『千葉大学ユーラシア言語文化論集』12：1–3
21.「シベリア・極北地域関係蔵書について」2010. 3『千葉大学ユーラシア言語文化論集』12： 27–33
22.「西シベリア・トナカイ牧畜民＝ツンドラ・ネネツの採捕活動と環境変化（環境変化と先住民の生業文化：陸域生態系における適応)」2012. 3『北方民族文化シンポジウム報告書』26：25–30
23. A. Yoshida, “Reindeer Herding and Environmental Change in Kobyai and Olenek districts, Sakha Republic. 2012. 3 ‘1st International Conference on Global Warming and the Human-Nature Dimension in Siberia. Social Adaptation to the Changes of the Terrestrial

Ecosystem with an Emphasis on Water Environments'. 99–103.
24.「ロシア、ツンドラ・ネネツにおけるトナカイ牧畜文化の存続と変化：サハ共和国との比較の中で（環境変化と先住民の生業文化：家畜飼育・牧畜における適応）」2014. 3.『北方民族文化シンポジウム網走報告』28：37–42
25.「本邦における氷下（こおりした）漁撈（概論）」2015. 3『千葉大学人文研究』44：135–173
26.「網走湖とその周辺における氷下漁：環境依存型漁獲活動としての考察」2018.『北海道立北方民族博物館研究紀要』27：1–14
27.「ロシア、ヤマル・ネネツ自治管区における個人経営トナカイ牧畜の変遷～最近の公式統計に基づく若干の分析～」2020. 12『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22：1–18
28.「日本の北方研究における千葉大学の役割」2022. 3『北方民族文化シンポジウム網走報告書』35：65–71

事典類

1．『世界民族事典』綾部恒雄（監修）、弘文堂．2000
担当箇所：「エネツ」（122r）「ガナサン」（163l）「ネネツ」（492mr）
2．『文化人類学文献事典』小松和彦他（編）、弘文堂．2004
担当箇所：「ザイカー（J. ZIKER）Peoples of the Tundra.」（427r）,；「ゴロブニョフ（A.V. GOLOVNEV）&オシェレンコ（G. OSHERENKO）Siberian Survival: The Nenets and their story.」（425r）
3．『世界民族百科事典』国立民族学博物館（編）、丸善出版．2014
担当箇所：「資源問題」（632–633頁）
4．『ロシア文化事典』沼野充義他（編）、丸善出版．2019
担当箇所：「狩猟・漁労・牧畜」（72–73頁）
5．『世界冠婚葬祭事典』川田牧人、松田素二（編）、丸善出版．2023
担当箇所：「シベリア」（334–337頁）
6．『ロシア極東・シベリアを知るための70章』服部倫崇、吉田睦（編）、明石書店．2024

担当箇所：コラム「シベリアの淡水魚とその利用―ロシア人と先住民の利用法」(60–63頁)、29「極東・シベリアの先住少数民族の生活・生業様式」(148–152頁)、49「ヤマル・ネネツ自治管区」(260–264頁)

その他

1．「〈書評〉高倉浩樹著『社会主義の民族誌：シベリア・トナカイ飼育の風景』東京都立大学出版会、2000年」2000. 11『上智史學』45：159–167
2．「遊牧ネネツという少数民族の世界―ロシア極北ツンドラ住人への旅」2003. 7『窓』125：2–8
3．「西シベリア・ネネツのトナカイ牧畜―ソ連解体後の動きと開発」2007.『民博通信』117：12–13
4．「御子柴先生を送る」2011. 3『言語文化論叢』5：9–11

写真展

2008年１～２月　千葉大学ユーラシア学会主催写真展「ユーラシアの十字路（クロスロード）諸民族の現在」(於千葉大学附属図書館)
2017年２～３月　文学部日本・ユーラシア文化コースユーラシア言語文化専修主催写真展「ユーラシア民族文化写真展～寒冷環境の克服と利用～」（於千葉大学附属図書館）
2021年９月・12月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ノーヴィイ・ウレンゴイ市文化部主催（小中学校向けイベント）「ヤマルの諸民族文化」の一部としての「日本の民族学者吉田睦写真展」(於ロシア、イーヴィイ・ウレンゴイ市)

WEB公開資料

東北大学東北アジア研究センター地域研究デジタルアーカイブ
「ヤマル・ネネツ自治管区におけるツンドラ・ネネツ人：生活様式と生業」
https://archives.cneas.tohoku.ac.jp/collection/tundranenets

吉田睦先生フィールド調査実績

＊ロシア連邦におけるトナカイ牧畜民調査

① 1993年７～８月　ロシア連邦サハ共和国、 エベノ・ブィタンタイ地区、ゴールヌィ地区、（エヴェン人トナカイ牧畜民調査）

② 1994年４月　ロシア連邦サハ共和国ニュルバ地区 （サハ人馬飼育調査）

③ 1994年７～８月　ロシア連邦サハ共和国チェルスキー地区、アンドリューシキノ地区（エヴェン人トナカイ牧畜民調査）

（①～③斎藤晨二科研費「シベリア牧畜民の民族学的研究」（1993–1995）による）

④ 1995年３～４月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区（ツンドラ・ネネツ人トナカイ牧畜民調査）

⑤ 1996年６～７月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区（〃トナカイ牧畜民調査）

⑥ 1997年12～1998年１月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区（〃トナカイ牧畜民調査）

⑦ 1998年３月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区サレハルド市（〃トナカイ牧畜民文献調査）

（⑥～⑦斎藤晨二科研費「シベリア狩猟・牧畜民の生き残り戦略の研究」（1997–1999）による）

⑧ 2001年10～11月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区（〃トナカイ牧畜民調査）

（味の素食の文化センター研究助成（2001年度）による）

⑨ 2005年３月～５月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区（〃トナカイ牧畜民調査）

（2004年度日本学術振興会二国間交流事業〔特定国派遣〕による）

⑩ 2008年３月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区プール地区（森林ネネツ人トナカイ牧畜民調査）

（吉田睦科研費『極北先住民の生存・共生システムとしてのトナカイ牧畜文化の研究』（2007–2009）

⑪　2009年７～８月　ロシア連邦サハ共和国コビャイ地区ラムインヒン・エヴェン民族区（エヴェン人トナカイ牧畜民調査）

⑫　2010年８～９月　ロシア連邦サハ共和国オレニョク・エヴェンキ民族地区（エヴェンキ人トナカイ牧畜民調査）

⑬　2013年２～３月　ロシア連邦サハ共和国オレニョク・エヴェンキ民族地区（〃トナカイ牧畜民調査）

（⑪～⑬総合地球環境学研究所プロジェクト、檜山哲也代表「温暖化するシベリアの自然と人―水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」（2009-2013）による）

⑭　2016年８～９月　ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区ターズ地区（ツンドラ・ネネツ人トナカイ牧畜民調査）

⑮　2017年８～９月　ロシア連邦モスクワ市・チュメニ市・サレハルド市（トナカイ牧畜民文献調査）

（⑭～⑮平田昌弘科研費「乳文化の視座からの牧畜論考―全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（2014-2019）による）

＊本邦における氷下漁業調査

⑯　2013年８月　秋田県八郎潟（八郎潟における氷下漁業に関する文献・聞き取り調査）

⑰　2014年１月　北海道網走市（網走湖、能取湖における氷下漁業調査）

⑱　2014年３月　長野県諏訪湖（諏訪湖における氷下漁業に関する文献・聞き取り調査）

⑲　2014年８月　青森県小川原湖（小川原湖における氷下漁業に関する文献・聞き取り調査）

⑳　2015年１月　北海道網走市（網走湖、能取湖における氷下漁業調査）

㉑　2017年１月　北海道網走市（網走湖、能取湖、サロマ湖における氷下漁業調査）

（⑯～㉑吉田睦科研費「気候変動条件下における氷下漁の環境文化論的研究」（2013-2017）による）